

press release



船田玉樹《紅梅(利休像)》(部分) 昭和17(1942)年

異端にして正統、
孤高の画人生

生誕100年 船田玉樹展

—異端にして正統、孤高の画人生—

新着情報(1月31日更新)

広島会場だけの見どころをご紹介します！

「きものDe美術館」詳細情報

各イベントの取材広報にもご協力ください！！

会 期：平成25(2013)年1月21日(月)～平成25(2013)年2月20日(水)

※会期中無休

開館時間：9:00～17:00(金曜日は19:00まで)

※入館は閉館30分前まで。

料 金：一般 1,000円(800円)

高・大学生 600円(400円)

小・中学生 400円(200円)

※()内は前売・20名以上の団体



- JR広島駅より約1km
- 広島城より約400m
- 市内電車(「八丁堀」で乗り換え)白島線で「縮景園前」下車約20m



名勝「縮景園」とともに歩む アートの杜
広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上鞆町2-22 TEL(082)221-6246
<http://www1.hpam-unet.ocn.ne.jp/> FAX(082)223-1444

【開催概要】

展覧会名称

生誕100年 船田玉樹展

開催クレジット

主催 船田玉樹展実行委員会(広島県立美術館、乃村工芸社・イズミテクノ美術館活性化共同事業体)
中国新聞社

後援 中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島、広島エフエム放送、FMちゅーピー76.6MHz、
エフエムふくやま、尾道エフエム放送、FMはつかいち76.1MHz、FMハムスター79.0MHz

協賛 医療法人あかね会 土谷総合病院、三島食品、広島県信用組合、大山皮ふ科クリニック

助成 芸術文化振興基金

会期

平成25(2013)年1月21日(月)～平成25(2013)年2月20日(水) ※会期中無休

入館料

一般:1,000円(800円) 高・大学生:600円(400円) 小・中学生 400円(200円)

※ ()内は前売・20名以上の団体

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳及び戦傷病者手帳の所持者と介助者(1名まで)の
当日料金は半額

※東日本大震災で避難者してこられた方は無料

※特別展入館券で所蔵作品展もご覧いただけます。

※学生券をお求めの際は学生証のご提示をお願いします。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail. keiko_yamamoto@nomurakougei.co.jp (山本宛)

担当 学芸課 永井明生 事業推進課 山本恵子

【新着情報】きものDe美術館の詳細について

「きもの」で広島県立美術館へ！船田玉樹の本物が当たる！豪華景品のチャンスも。

現在開催中の「生誕100年 船田玉樹展」では、関連イベント「きものDe美術館」を実施中！船田玉樹展の会期中、着物で船田玉樹展をご鑑賞の方にはオリジナルクリアファイルをもれなく全員にプレゼント。

さらに、着物で来館された方に豪華景品が当たるチャンスも！船田玉樹の御子息・船田奇岑様からは、船田玉樹の作品《春蘭》(紙本墨画・短冊)、そのほか大島紬着物や西陣織袋帯など、豪華すぎる景品をご用意しております。ぜひ皆様、会期中はお着物でお越しください。

【景品について】

船田玉樹《春蘭》(紙本墨画・短冊)、本場大島紬着物、京友禅付下、西陣織袋帯、本麻京袋帯、緋京袋帯、組紐バッグ、草履、組紐ストラップ、他

【景品ご提供者】

株式会社いづみや商店様、東呉服店様、船田奇岑様、山西千栄子様、わかさや呉服店様

期間 | 1月21日～2月20日

対象 | 着物で来館された方全員

申込用紙配布 | 3階受付 ※1日お一人様一枚限り

景品見本 | 3階ロビー

申込用紙投函 | 3階ロビー応募箱

| 応募方法 |

3階受付で申込用紙を受取り、景品見本(3階ロビー)の番号と必要事項を申し込み用紙にご記入ください。その後、3階の応募箱に投函。当選は、当選者にのみご連絡いたします。

| 景品のお渡しについて |

当館にてお渡しとなります。なお、遠方等でご来館いただけない場合は、送料着払いでの発送もお受けいたします。商品発送代金は、お客様にご負担いただきます。ご了承ください。



press release

【新着情報】広島会場だけの見どころをご紹介します！

「生誕100年 船田玉樹展」は、近現代日本画史の中で異彩を放つ孤高の画家・船田玉樹の全貌を紹介する展覧会です。会場に足をふみ入ると、その出品点数の多さに驚かれると思います。リスト上は226点ですが、特別出品も加わり、全239点。前期後期と約30点を入れ替えますので、常時鑑賞できる点数は約210点となります。大作の屏風や展覧会出品作なども多数含まれますから、まさに会場を埋め尽くさんばかりの量です。

本展覧会は、東京・練馬区立美術館で昨年7月に開幕し、その後数ヶ月の間をおき、満を持して地元・広島県立美術館に巡回、現在好評開催中です。東京会場よりも展示スペースは広く、出品点数もかなり多くなっていますので、見応え十分！「画業のはじまり」「新たな出発」「水墨の探究」「孤高の画境へ」の4つの章を設けて、船田玉樹の画業を多角的に紹介していますが、**広島会場では独自の展示構成として「序章」を設けました。晩年の作風をよく示す梅と松の大作をはじめ、絹に岩絵具で繊細に描かれた牡丹図、生涯追求し続けた墨による作例（山水図と河童図の対照的な2点）などをまず冒頭で紹介し、幅広い玉樹の絵画世界の一端を体感していただきます。**

続いて、第1章「画業のはじまり」。師の速水御舟や小林古径、交友のあった丸木位里や巖谷小波などの作品と並置することで、意外な影響関係なども浮かび上がってきます。「ぎょくじゅ」という雅号は、「ぎょしゅう」と響きが似ていますが、あるいは師を強く意識して「玉樹」と名乗ったのではないかと想像がふくらみます。古典に学んだ正統派の日本画から、「日本画のアヴァンギャルド」と称される実験的な諸作まで、**現在の目から見ても実に鮮烈な作品の数々をお楽しみください。**

第2章は「新たな出発」です。東京から広島に戻った玉樹は、院展や新興美術院展に作品の発表を続けます。それらの迫力ある出品作とともに、**「珠玉の小品群」として掛軸を中心とした花や風景などの作品も紹介しています。**また、玉樹の創作上の特徴として、自身が選び取ったモチーフを徹底的に掘り下げる姿勢があります。とりわけ、**東京にある古刹・九品仏浄真寺や郷里の名瀑・二級峽を繰り返し描いた連作などは必見です！**

第3章は「水墨の探究」。画業初期から晩年まで、玉樹は水墨表現の可能性を追求していました。この章では、「絹本」と「紙本」の2つのコーナーにわけて、玉樹が試みた多方向の水墨実験の諸相を、実作品によって辿っていただきたいと思います。

そして、第4章の「孤高の画境へ」。まずは「河童図と扇面図」のコーナーです。水墨への取り組みの一環でもありますが、**玉樹の持つ全く別の側面である「河童描き」の画家としての姿や、扇面に繰り広げられる「山の家」シリーズを紹介します。**さらに、大病ののちに描かれた自画像やガラス絵なども並べ、いよいよ最後のコーナーでは「屏風の競演」です。晩年になって、その作品はますます華麗に、そして豪胆に。**細かい筆致で画面を埋め尽くすような松や梅、枝垂れ桜などの屏風の迫り来る力は、なかなか図版では感じる事ができませんので、ぜひ会場で実作品と対面していただきたいと思います。**

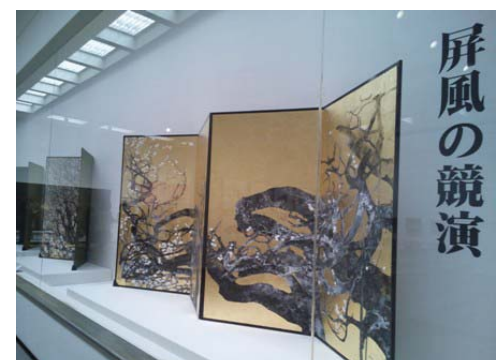
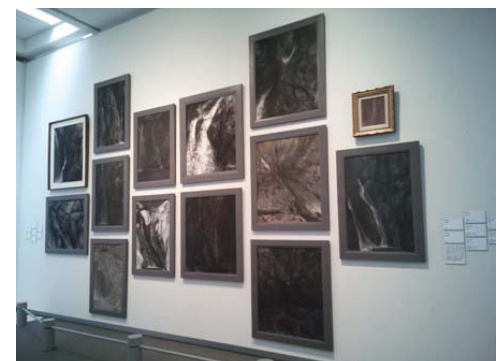
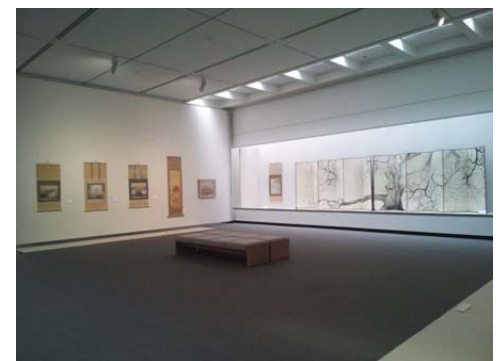
今回の展覧会に向けて行った調査で、これまで知られていなかった玉樹の重要作品が次々と発見されました。それらも可能な限り展示しています。ここ数年、玉樹の画業については再評価の機運が高まり、東京や関西でもその魅力が知られるようになっていきます。実際にその作品を見ていただければ、なぜ今この画家が注目を集めているか、きっと感じていただけるはず。約一ヶ月と会期が短いので、どうぞお見逃しなく！

(広島県立美術館主任学芸員 永井明生)

生誕100年

船田玉樹展

A Centenary Retrospective
Gyokuju Funada



【展覧会構成と内容】

I：画業のはじまり―師・速水御舟、小林古径と共に

中学時代から油彩を始めた玉樹は、はじめ洋画家の山路商に学び、襲光らとも交流。しかし、上京後、琳派絵画に感銘し日本画に転向。1934年より速水御舟、その後は小林古径に師事した。1938年からは歴経美術協会で丸木位里や岩橋英遠らと研鑽。シュルレアリスムなどを果敢に取り込んだが、1944年に応召、病を得て広島に帰り、以後故郷を離れることはなかった。第一章では、師友の作品も併せ、自らの絵画世界を探究しはじめた玉樹を紹介する。

II：新たな出発―生涯のテーマ、花そして風景

終戦後、徐々に大作を描き始めた玉樹は、1948年からは院展に再び出品、幻想を帯びた風景画は安田靫彦から激賞された。だが、出品サイズをめぐる齟齬から1963年に院展を脱退、新興美術院に理事として参加した。そこに発表した《九品仏》や《滝》連作は、積葉や睡蓮を執拗に描き続けたモネを連想させる。一方、個展でも同じテーマが追究され、折々の花や風景等いずれも密度のある珠玉の小品群となっている。

III：水墨の探究―異端にして正統、抽象への挑戦

1960年代半ばから、玉樹は再び水墨表現にも冴えを見せはじめる。1930年代半ばから培った様々な技法を駆使して、山水表現を展開。1974年にクモ膜下出血で倒れた後も、不自由ながら指先を何とか制御し、玉樹は憑かれたように水墨で抽象的な形象に挑み続けた。数千枚に及ぶ水墨実験の末、さらに気韻の生動する山水表現へとそれは展開を果たすことになった。

IV：孤高の画境へ―華やかな大作、屏風の競演

大病を機に、玉樹は新興美術院を脱退。以後無所属となって制作三昧の日々を過ごす。水墨にガラス絵のコラージュ、水墨河童を一気に制作し、また河童の詩を何篇も詠んだ。また、扇面《山の家》連作は墨の濃淡やぼかして気宇壮大な世界の広がり表現。最晩年には、驚くことに一層華やかな梅や桜、松の大作屏風を積極的に制作している。そして、1991年、「画神」に取り憑かれた画家は世を去った。

【作家略歴】

船田玉樹(ふなだ・ぎょくじゅ) 1912年、広島県賀茂郡広村(現・呉市広)生まれ。1936年、院展に初入選。以後、新日本画研究会展や歴経美術協会展などで前衛的な作品を発表し続けた。1944年から広島に拠点を移し、多彩な作品を発表。1991年、急性心不全で死去、78歳だった。



画室での制作風景

【船田玉樹について】

※「生誕100年 船田玉樹展」公式図録兼書籍 『船田玉樹画文集 独座の宴』(求龍堂)より抜粋

氏は最後までその作品に向かい続けるのだ。画面いっぱい松と梅をとにかく描き続けること、その上に金箔を貼り、また描く。その描線の奥にあって消されたものもまた生命(いのち)。ここで私はミケランジェロのピエタやガウディの未完のサグラダファミリアを想い浮かべるべきかも知れない。この未完成なものへの執着は、宮沢賢治の異稿の多さと較べるべき長い道程(みちのり)だ。

―北川フラム(アートディレクター)

春のレンゲ、サクラ。夏のカラスアゲハ(たまにミヤマカラスアゲハ)、イトトンボ。秋のアケビ、シイの実。そして冬の足指の霜焼け・・・そんな自然に対する、四季に対する実感は、私の日本美術に対するアニミズム的理解の根幹を形成している。(中略)玉樹と私は、まさに同じ空気を吸っていた。

―山下裕二(明治学院大学教授)

船田は風景を得意とした。だがその本領は、一本の大樹を描くことにある。(中略)闇の中から木が、家が幻のように浮かび出てくる、そのような世界を船田は描こうとした。重ねた色の底から、年を経て、下地の色が洩れ出てくる色香を愛した。私はそれを、制作のはじめから手が離れるまで、二年間ほどそばで見ている『枝折桜』において体験した。私にとっても美学の道場であった。

―金田晋(美学、東亜大学特任教授、広島大学名誉教授)

モノクロームの画面から伝わる韻律は、時として無窮へのたじろぎを覚えさせながら、ゆるやかで甘美な抱擁感にみちびくような尊い何ものかをも感じさせる。あるいはまた、大気の幾重にも重なるうそぶきが、やがて壮大な交響楽に変じてゆくようなスケールをもっているのだ。(中略)

それらの作品の前では、言語も、観ることさえも歯がたたないかもしれない。

我々は、ただその前でたずむしかない。

―野地耕一郎(練馬区立美術館主任学芸員)



『船田玉樹画文集 独座の宴』(求龍堂)
3150円(税込)

press release

【主要作品解説】

生誕100年

船田玉樹展

A Centenary Retrospective
Gyokuju Funada



《花の夕》1938年 180.0×359.3cm 紙本彩色・四曲一隻屏風

四曲一隻の画面中央に大樹を据え、その上から絵具を画面に直接滴らせたかのように、大胆に赤・ピンク・白の花弁を散らしている。花の部分にはドイツ製のコチニールという染料を用いたとのこと。記念すべき第1回歷程美術協会展出品作。



《紅梅(利休像)》1942年 182.5×204.2cm 紙本彩色・額

歴史画を研究していたころの代表作。利休と秀吉の逸話の中で、朝顔の茶会に続くもの。秀吉の難題に応えた利休の美への信念が顔に表れる。利休のモデルは、玉樹の父小四郎ともいわれるが、玉樹の晩年の顔とも重なって見える。



《残照》1956年 236.0×206.0cm 紙本彩色・額

昭和31(1956)年の第41回院展で奨励賞を受賞した大作。樹木の林立のようにも抽象形態のようにも見えるその幻想的な画面は、マックス・エルンストのシュルレアリスム作品を連想させる。



船田玉樹《大王松》1947年 181.5×364.0cm 紙本彩色・四曲一隻屏風

松の中でも、葉の長い大王松を画面いっぱい展開する。実際の大きさよりかなり大きく、畏敬をもって描かれている。人の視覚とは違う様相を見せる植物にはアニミズム的な神が宿っているようでもある。

【関連イベント】

美術講座

「孤高の画人生—船田玉樹」

講師：永井明生（広島県立美術館主任学芸員）

日時：2月3日（日）13:30～（開場30分前）

場所：地階講堂

※聴講無料。申込不要（先着200名）

記念コンサート

1)「仏教讃歌のタベ」

出演：仏教讃歌混声合唱団コール・スガンディ

日時：2月8日（金）17:00～

場所：1階ロビー

※聴講無料。申込不要

【コール・スガンディとは】

コール・スガンディは平成9年に発足しました。龍谷大学、京都女子大学、広島音楽高校、崇徳高校グリークラブなど、学生時代に仏教讃歌を歌っていたメンバーが中心です。「スガンディ」とは、古代インドの言葉で、「よい香りの」、という意味の言葉。多くの作曲者の思いの込められた仏教讃歌を、よい香りが心地よく広がっていくように、多くの方に聞いていただき、親しんでいただきたいとの思いで、活動を続けられています。



2)「船田玉樹にささぐ 実験を楽しむ心—第1回広島電子音楽研究会」

出演：船田奇岑（絵師・テルミニスト 船田玉樹子息）ほか

日時：2月9日（土）・10日（日） 各10:00—16:30

場所：地階講堂

※船田玉樹展入館券が必要です（定員200名）

【内容について】

「生誕100年 船田玉樹展」の関連イベントである第1回電子音楽研究会は、「アバンギャルド、前衛、実験的」をキーワードに、「発信、交流、研究」を目的として開催されます。9日（土）は、公開セッティング、公開リハーサル、ワークショップにあて、10日（日）は終日ライブイベントという予定です。両日とも、船田玉樹展のチケット半券で何度でも出入り自由とします。

現在制作を進めている本イベントチラシのメインビジュアルは、船田玉樹の作品をもとにイラストレーター・画家の田中修一郎氏がデザイン。この「電腦利休像」はグッズ展開も検討中。斬新な音楽を、船田玉樹の作品とともに味わってみてはいかが？



ワークショップ

※すでに定員に達しております。当日のWSの様子など取材していただけると幸いです。

※ワークショップは事前予約制 各回とも定員15名

※詳細は当館にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

1)「玉樹に倣う 扇面に描こう！水墨編」

講師：森山知己（日本画家）

日時：2月2日（土）13：30～

対象：中学生以上

場所：3階ロビー

2)「玉樹を模写 扇面に描こう！色彩編」

講師：王培（広島市立大学助教）ほか

日時：2月17日（日）13：30～

場所：3階ロビー

対象：中学生以上

ワークショップ申込先：

RCC文化センター「美術館ワークショップ係」

FAX：082-222-2270 電子メール：sankan_ws@rccbc.co.jp

往復はがき：〒730-0015 広島市中区橋本町5-11

ワークショップ問い合わせ先：

TEL 082-222-2276（RCC文化センター広告・イベント事業部）

受付時間/平日10:00～17:00

ギャラリートーク

講師：永井明生（広島県立美術館主任学芸員）

日時：毎週金曜日11：00～、2月1日（金）・2月15日（金）18：00～

場所：3階企画展示室 ※船田玉樹展入館券が必要。

きもの De 美術館

※本プレスリリースのP2新着情報をご参照ください。

広島県立美術館パートナーズクラブ・プレゼンツ

「アートと私の美味しい時間」

日時：2月15日（金）受付16：30／レストラン開場18：00

出演者：武田正和（三宅本店「千の福めぐり」商品開発担当者）

越智裕二郎（当館館長）

会場：特別展会場及び館内レストラン「ラ・シガール」

定員：50名（先着順）

料金：1人3,000円（税込）※要事前申し込み。詳しくはHPまで。

美術館といえば、アート。そのアートをもっと楽しむことができれば—「アートと私の美味しい時間」では、視覚だけにとらわれず味覚などの五感でさらにアートを愉しむ、そんな時間を提供します。第1回目は、「世界遺産ヴェネツィア展」とワインを楽しみ、大好評のうちに終了いたしました。

そして、待望の第2回目は、「Part 2; The days of sake and arts.」と題して、「生誕100年 船田玉樹展」とのコラボレーション企画を開催します。当館で開催中の展覧会を鑑賞し、画家の故郷である呉の蔵元「三宅本店（千福）」の日本酒とともに特別ゲストをお招きして、船田玉樹そして日本酒とアートについて語ります。アートとお酒の豊かな時間へようこそ。

